



「見るために目を閉じる」～半眼のススメ

おはようございます。後期が始まりました。季節は、このところしばらく夏と秋を行ったり来たりしていましたが、10月に入り、朝夕はすっかり秋の気配、という感じがします。短い秋休みは、皆さんには後期に向け再スタートを切る丁度よい区切りになったのではないかと思います。

先日の前期終業式では、紙ヒコーキとパスタを用意して、心の形と準備行動の2つが必要という話をしました。今回は、秋という季節にちなみ、芸術をめぐる話をしてみたいと思います。「見るために目を閉じる」という言葉を基に始めます。キーワードは「半分」です。

早速ですが、この「見るために目を閉じる」という言葉は、私が北高1年の時に美術の西原という先生に教わったもので、ゴーギャンという、フランス印象派の画家の言葉です。授業のどんな場面だったか覚えていませんが、一見矛盾する表現なので面白いな、と思い、ずっと記憶に残っていました。目を閉じると、目の前の現実が一瞬見えなくなり、心は少し自由になれます。「想像の翼」を拡げ見えてくるものを画家は描こうとした、それぐらいは当時の私も理解できました。



それから30年ほど経った10年ほど前のこと、住職になった大学時代の友人から仏様の顔について教えてもらうことがありました。仏像の多くは東大寺大仏のような顔をしています。目に注目すると、半分しか目を開けていません。阿修羅像や金剛力士像のように表情はいろいろありますが、仏様というのは薄目を開けているものだと思っていて、理由は考えたこともありませんでした。

なぜ仏様は「薄目」なのか？切れ長の目で何を見ているのか？それは、薄目でも切れ長の目でもなく「半眼」の仏様は、開けた半分で外の世界を、閉じた半分で自分の心の中を見ているのだそうです。また、目の前に見えるものを「肉眼」で見て、物事の奥にある真理を「心眼」で見よ、という意味もあるのだそうです。仏様は、現実の世界と心の中に広がる世界の両方を半分ずつ見ている、というわけです。同じ仏像でも金剛力士像（仁王様）は大きな目を開けていますが、それは敵や邪悪なものを睨み返して我々を護ってくれているのだということも知りました。そういえば、この暴力追放ポスターにも、「はまり役」の仁王様が登場しています。



皆さんは今、進路実現の分岐点に立っています。人生の舵をきろうとしている皆さんには、この「半眼」をおススメします。皆さんの半眼とは、開けた部分で「これまでのこと」つまり、現在の自分を冷静に見つめること、一方、閉じた部分で「これからのこと」、未来の自分をトキメキをもって想像するという半眼です。過去を見つめないことは成長に繋がりません。また、皆さんのような若者が、未来に目をつぶることも許されません。夏と秋を行き来し秋になっていくように、夢と現実の挟間を行き来しながら、自分の夢を現実の方に力強く手繰り寄せていきましょう。



今日は芸術の秋にちなみ、美術の授業の思い出を基に「半眼のススメ」をしました。ただし、授業中は単なるウトウトの「眠り目」であって「半眼」とはみなされません。仁王様のようにしっかり目を開けて眠気を追い払い、目の前の学びに集中すること。実りの秋、眼力を豊かに蓄え、皆さんの一層の頑張りを期待します。